



うたそら

第
3
号

2021
July

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	04
テーマ詠欄 「遊」	26
一首評 「そらよみ」	34
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	36
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	38
次回予告・編集後記	39

うたそら 第3号

発行：2021.07.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

次号予告

うたそら
第4号

連作欄 8首の連作自由詠
テーマ詠欄 「学」
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集

投稿先等、
詳しくはうたそらの
ご案内ページを
ご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>



第4号 21 8/31(火) 24時

•8首の連作自由詠 •テーマ詠「学」1首

第5号 21 10/31(日) 24時

•8首の連作自由詠 •テーマ詠「食」1首

編集後記

近畿では例年より3週間も早く梅雨入りとなりましたが、そのぶん前倒しで梅雨明けとはいきないようです。ときどき夕立も見られるようになってきて一歩一歩夏らしさが増してくる今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

このたびは短歌誌「うたそら」第3号へのご参加、ありがとうございます。ご寄稿くださった皆さまに心より感謝申し上げます。第3号の参加歌人さまは109名、連作欄には88名、テーマ詠には86名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は「遊」。少し難しいお題だったのかもしれません、楽しい遊、さみしい遊、懐かしい遊など、さまざまな「遊」が集まりました。まだまだいろいろな遊びを我慢している昨今、お家でゆっくりと「遊」の短歌をお楽しみいただければ幸いです。

前号の「うたそら」から気になった／好きな一首を選んで、200文字程度で思いを綴っていただく一首評「そらよみ」は第2回となりました。歌を投稿するだけではなく、読んで感想を伝える／もらうことで、得られる気づきや喜びもあるのではと思います。ぜひ今回もご参加ください。

また、短歌なりレーコラムでバトンを引き継いでくださったのは御殿山みなみさん、リレーエッセイはchariさんが書いてくださっています。

「うたそら」ではTwitterでの呟きもお待ちしております。「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をお聞かせください。

次号は8月末〆切の9月初旬発行、テーマ詠のお題は「学」です。無事に夏を超えた皆さまのすてきな作品を楽しみにお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ



短歌募集

投稿先等、
詳しくはうたそらの
ご案内ページを
ご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>



第4号 21 8/31(火) 24時

•8首の連作自由詠 •テーマ詠「学」1首

第5号 21 10/31(日) 24時

•8首の連作自由詠 •テーマ詠「食」1首

五十子尚夏	石川順一	@Hitler57	菊池洋勝	@kikutitic
泉葉子	伊藤すみこ	@yoko00022	きつね	@coconutkikko
うきつけ	宇祖田都子	@110sumikodayo	君村類	@001kitsune
泳二	泳二	@Eishimada	久助	@kmrr_r09
大坪命樹	相河東	@hs welt	黒須紗里菜	@nTbIBm64shlt1ap
岡田奈紀佐	青藤木葉	@aikawa_azuma	くろだたけし	@tuk11226
小椋杏	あれ十	@konoha_ao	じゅわせ	@tkuro2016
岡田鶴	秋山生糸	@ponko_san	江口美由紀	計 109 名
近藤瑞貴	麻倉ゆえ	@kiito25	@myuki_eguchi	たくさんのご参加 ありがとうございます！
御殿山みなみ	足立のひやか	@AsakuraYue	@kaizen_nagoya	@umisayayoru
酒匂瑞貴	アダムス理恵	@adams_tanka	@kaizen_nagoya	飛行機
河岸景都	天野うやめ	@uzume_no_hijiri	@hitohitohitok	菊池洋勝
佐藤水魚	雨虎俊寛	@amefurashti3107	@amicus08	@coconutkikko
汐射ハルカ	新棚のこ	@hccmono	神ヤ飛 ^レ 魚	きつね
紫苑	有村桔梗	@chattenoire_k	河岸景都	@anata_tanka
詩季			涸れ井戸	@haru_c17h17d2n
鹿ヶ谷街庵			@kareido1111	@sakawa_mi
しじだぬこ			@kate_kawagishi	@s_hana111
			@qop397	@satohio_tanka



3

リレーエッセイ

「ら」 「ら」 「ら」 「ら」

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

恋

chari

テーマ
書き手

昨年の夏、大学生になつた息子と神威岬までドライブした。息子とは、中学、高校の六年間、ほとんど口を聞いたことがなかつた。行き帰り四時間ぐらいであつただろうか、「一人でその六年間を埋めるかのようにたくさん話した。家族のこと、いじめのこと、部活のこと、受験のこと。初めて話す内容ばかりだつた。そんな中に、恋の話も含まれていた。

息子はテニス部で、八月半ばにやつと引退し、

受験勉強に本腰を入れ始めた。予備校に通わなかつた彼は、放課後、学校の自習室で勉強して

いた。九月の大雪の日の自習室が閉まる時刻、

彼はため息をつきながら校舎を出た。その時、

息子がいた。父さんは馬鹿でかいビニル傘を借りて、本当によかつたと思ったよ」「えっか。それで、お前はどうしたんだ」「しようがないだろう。傘を差し掛けたまま、黙つて彼女に付いていったよ」

「この時は、父さんの馬鹿でかいビニル傘を借りてきつい、本当によかつたと思ったよ」

「えっか。それで、お前はどうしたんだ」「しようがないだろう。傘を差し掛けたまま、黙つて彼女に付いていったよ」

「二人は、そのまま駅まで歩いて、電車に乗つたらしい。電車の中でも、彼女の涙は止まらず、できるだけ人目に付かないように息子がドアの隣で庇つていたそうだ。

「お前の胸で泣くつて感じにはならなかつたのか」

「ううん。微妙なことひだつたかな」
彼女の目的の駅に着き、また、雨の中を歩き出したそつだ。辿り着いたのは総合病院。そこで、初めて彼女が口を開いて「ありがとう」と言つて、彼女は病院の中へ駆けていつた。「おばあちゃんが亡くなつたんだつて。昨日、一緒に笑いながらテレビを観ていたのに。心筋梗

死んでしまつたんだつて。止まらなくなつて歩いて、走つて行つちやつたんだ」

息子の恋の話はこれで終わり、話題は深夜ラ

ジオへと転じられた。

「それでああ、彼女が言つたんだ。『いつかしゃべ。そして、さよなら』って」「お前は、なんて言つたんだ？」
「ああ」って。そしたら、彼女が『馬鹿ね』って言つて、走つて行つちやつたんだ」

息子の恋の話はこれで終わり、話題は深夜ラ

ジオへと転じられた。

「それでああ、彼女が言つたんだ。『いつかしゃべ。そして、さよなら』って」

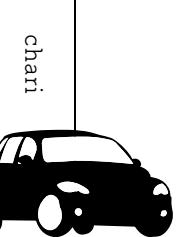
「お前は、なんて言つたんだ？」

「ああ」って。そしたら、彼女が『馬鹿ね』って言つて、走つて行つちやつたんだ」

息子の恋の話はこれで終わり、話題は深夜ラ

ジオへと転じられた。

成就する恋を恋とは呼ばないと発達心理Ⅰのテキスト



chari

鳴田れいな	@sakrako0304	西淳子	@jacky244Ray	三浦なつ	@natsumiuraok
西 鎮	@xi_zhen_ivUT	西村曜	@nsmrakira	深影コトハ	@cotoha_mikage
雀來D	@jacksbeans2	ネコノカナヒ	@nekonokanae_utu	衣未	@mimi_4567
諏訪灯	@_skydew	薄荷。	@aie0himeco	虫武一俊	@mushitake
ヤサシースペース	@sesamespace_m	はとサブノ		六浦筆の助	@Tohakumutun5057
草 流	@kusa2619	芥井かだ	@sugar_high10	六厩めれう	@meremummai
たえなかやま	@suzusuzu2009	花浜紫檀	@uri_murasaki	村田一広	@muucci2018
多香子		雛河麦	@may_spica_358	最寄	@xaviercohen
瀧口美和	@abcdefgijklmiw	シノヘ寿司	@xHksbnNR4ww1wj8M	ゆやゆる	@yuya_yuki_tanka
竹林ひづれ	@chik325	平本文		むつ	@b7282e_akaneiro
茅野	@suiakakinbi	廣珍堂	@Hirochin_dos	和田八尾	@yaotanaka
千原ひざみ	@white22autumn	笛地静恵	@Ymcx6rhzyEZgwq	夜花	@yohana_no_sekai
chari	@kohagi_tw	福山桃歌	@momoka_fukuyama	龍翔	@oppizuntsuan
月硝子	@geshodo	せしむら	@gottoto91100602	芦花	@roka_06
道家俊雄	@csSR34JcfLTXWmr	歩歩	@h_o_o_o_n	若枝あいづ	@WakaedaArrau
こゆえタ夏	@croissant Hey_Z	細川ヒリカ	@uvluvkasen	渡辺かおり	@lazybirdcage.t
中村成志	@nakam8	歩歩	@mskpompomtowa23	渡邊知博	
成瀬悠	@naruse000yuu	眞野ありか	@o_shironec	和田晴美	@hrm143ponta
じ	@yuru1ne1217han	三浦くみ	@miurakumori		

きふけつきな」となつて文字上は回文となる。これにノれたら「文字派」かもしれない。

「文字派」と「音派」でなにか戦争が起きているわけでもないので安直な見解を述べると、体感では「文字派」の人が多い気がする。とはいえる「音派」の人も珍しいとまでは感じない。ちなみに私はごりごりの「文字派」だ。「同音異字」の回文は、回文じゃないと思っている口である。とりあえず、回文には「文字派」と「音派」がいる。このことは気づいていた。しかし最近、つまりは短歌を書き始めてしばらくたつてから、この二つは本質的には多くのものを共有しているのではないかということに気づいた。

回文の「文字派」「音派」をざっくり翻訳したら、「目で回文を楽しむ人」「耳で回文を楽しむ人」となるかもしない。とはいへ後者の場合、それは完全なる音的対称性ではないはずである。

例えば「チンパンジー」という名詞。ここに二回出てくる「ン」は、厳密には発声が異なるはずだ。前者は「ム」に近い音になるし、後者は比較的「ン」本来の音になるだろう。とはいえて「チンパンジー」が回文になつたとして（そうだなあ、「チンパンジー人パンチ」でいいだろうか?）「音派」の人もその音素的な差異はスルーするよう思う。

根本は「文字派」の考え方と同じだ。まずひらがな的な区切りをした上で、文字を見るか音を見るかの違いでしかない。なぜなら、そもそも「逆さから読む」ことは非常に難しい。難しいから、どこかで「逆さからの読み方」を定義するしかない。その定義は、現状「文字単位」なのである(ここに踏み込むと長くなるので割愛するが、当然、ローマ字回文なんかも観念される。しかしこれはこれで、「逆さからの読み方」の別定義でしかないと考えられる)。

そういう意味では、回文界に存在するところの「文字派」「音派」という考え方は、短歌界に置き換えると、どちらも「文字派」でしかないような気がする。ということで短歌の話をします。

短歌を定義することが簡単なのか困難なのかはわからないが、とりあえず「5 7 5 7 7」と言うしかあるまい。ではこの「5」とか「7」とかの単位はなんになるのか。ひらがな単位になるしかないのだろう。一応触れておくと、拗音はそれがくつつくひらがなに包摶されるし、促音は独立する。だから「注射針」は「5」だし、「フルトップ」も「5」だ。

とはいっても、ひらがな単位の「5」「7」は現実的には無理だろうと感じられるふしがあ

例えば「カタルシス」という言葉がある。これは「5」だ。すごくわかる。文字数も「5」だし。では「けんちんじる」はどうだろう。短歌的には「6」なのだろう。文字数は間違いないなく「6」だ。ただ、私には「けんちんじる」が「カタルシス」より「数が多い」ことがしつくりこない。「カタルシス」って口に出す時間と、「けんちんじる」って口に出す時間を比べたら、後者の方が短いんじゃないかと思つたりもする。これは何が悪いのかとなれば、きっと口語短歌が悪いのだろう。私が大好きで、ずっと書き続けていたる口語短歌が悪い。やはり、ひらがな単位で考へるというのは書き言葉の考え方であるし、「吟じ」とか「決まつた節回し」とかを持ち込まなければ口語短歌では成立しないように思う。となると、口語短歌における「57577」は、「それっぽい長さ」でしかなくなるわけだけれども、そんなもの共通項的に定義できるわけがない。

ということで、最近は口語短歌の展望は朗読にあるんじゃないかなってことを考へている。朗読のされ方によつて、口語短歌の定型感が決まっていくんじゃないだろうかということを、しかしこれに關してはまだなにも結論がないの

連作欄 8首の連作

僕たちは愚者のカードを引き当てて教えを捨てる街を出ようよ
不死鳥ですら灰になるんだからさ、病のままに、歯は当てないで
スイミングプールや名前、飛行機が崩れ落ちても変わらない人
夜を超える 抱えた子守唄を見て大丈夫だと息を繰り出す
歳とる暇なんてない指を組み赤信号を通り抜けよう
迷子にも見つかる準備があるので 希望の塔をちょっとのぼつて
別にアイラブユージやなくてもいいじゃん月は忘れてピザがうまいね
朝の空氣に塗りかえるいつだつて青い世界でなくなりたいから

菜の花なのはなあの日からもうなにもかも違う世界に棲む熊ん蜂
切られてもまた同じようく跳ねてくる癖毛ひかりの中を歩くよ
ビル解体滞りなくこちらではクロワッサンが育っています
目をあわせるふりがずいぶん上手だね 指先に絡み出す夢の糸
見晴らしの丘より見れば蛇行する川に巻かれて安らかな街

でたらめな握手でも繋げれば良くて初来日のパンダを祝う
クリームにぴんと角立つようにして今だとわかるきみとわたしの
陽だまりはとろりと溶けて死んだこと気づいていないおばけの気持ち

例えば「カタルシス」という言葉がある。これは「5」だ。すぐわかる。文字数も「5」

している。それってと同じだ。まずひら、文字を見るか音をなぜなら、そもそも「逆難しい。難しいから、「方」を定義するしか「単位」なのである(こで割愛するが、当然、「方」の別定義でしか界に存在するところ考え方は、短歌界に文字派」でしかないとで短歌の話をしまず「57577」と單なのか困難なのかがない。

例えば「カタルシス」という言葉がある。これは「5」だ。すごくわかる。文字数も「5」だし。では「けんちんじる」はどうだろう。短歌的には「6」なのだろう。文字数は間違いなく「6」だ。ただ、私には「けんちんじる」が「カタルシス」より「数が多い」ことがしつくりこない。「カタルシス」って口に出す時間と、「けんちんじる」って口に出す時間を比べたら、後者の方が短いんじゃないと思つたりもする。

これは何が悪いのかとなれば、きっと口語短歌が悪いのだろう。私が大好きで、ずっと書き続いている口語短歌が悪い。やはり、ひらがな単位で考えるというのは書き言葉の考え方であるし、「吟じ」とか「決まった節回し」とかを持ち込まなければ口語短歌では成立しないよう思つ。となると、口語短歌における「57577」は、「それっぽい長さ」でしかなくなるわけだけれども、そんなもの共通項的に定義できるわけ

か。ひらがな単位に応触れておくと、拗かなに包摶されるし、「射針」は「5」だし、な単位の「5」「7」ということで、最近は口語短歌の展望は朗読にあるんじゃないかなことを考えている。朗読のされ方によつて、口語短歌の定型感が決まっていくんじゃないだろうかということを。しかしこれに関してはまだなにも結論がないので、この話はここで終わる。

七望遠鏡*

3



短歌にまつわるあれこれについて

自由さままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…



テーマ 文字と音

短歌をはじめるずっと前、回文を作っていた。

「竹やぶ焼けた」のように、逆さから読んでも同じ文章のことだ。プレーヤーは結構少ないけれど、ちゃんとコミュニティもあつたりした。どういうか、ある。

そのコミュニティで、回文って「文字派」の人と「音派」の人がいるよね、という話をしたこと、なんとなく今思い出している。作り手の目線の話のようでいて、読み手目線の話だから、「うたそら」つて「短歌誌」でいきなりそんなわけわからない話をするな、読み飛ばすぞ、と思われた方はこらえていただきたい。これが伏線となつて短歌の話につながつていきますから。

このように、誰がどう見ても回文だとは言えないと、誰がどう見ても回文だとは言えないけれど、惜しいし回文ってことにしていいんじゃない、というのを「緩和規則」という。なお、この概念自体は回文界の統一見解だが、この呼称がそうとは限らないことは申し添えておく。私が勝手にそう呼んでいるだけ。ちなみに濁点のあるなしの緩和規則を「清濁変換」と私は呼んでいる。清濁変換は回文と認めない人も多い。体感では、むしろ回文を作らない人にその傾向が強い。

本題に入ろう。緩和規則の中には、「異音同字」と私が呼んでいるものと、「同音異字」と私が呼んでいるものがある。これは本当に私しか呼ばないかもしれない。それくらい、回文なんてもどつちも不自然に思わない、という人もいるかもしれない。ただ、ほとんどの人はここを感じ方に濃淡があるのでないかと推測している。もう少し例を足すなら、「泣きつ今日来し吸血鬼な」という文章は、パツと見た感じ回文ではな

夏のぐだぐだ

足立のびやか

ウメダウーマン

雨虎俊寛

春過ぎて夏來にけらしコーヒーの冷たいやつが飲みたくなつた
青のゲシュタルト崩壊起きそくなべつたりペンキ塗りたての空
空色を空で定義するのならPM5時の空は何色
「しあわせ」に形というのがあるのなら例えれば寿司の形をしてる
もうこんな世界だつたら意味はない大ラグナロク推しの引退
日付変更線来るなど眠らない徹底抗戦午前3時
徹夜明けボロボロの脳と心臓で迎えた朝日世界はきれい

疑問符

天野うづめ

ナツウタナツコイ

新棚のい

鳥籠のように記憶は悲しくてふいにあなたと立ち止まりたい
せめてもの慰めとしてあるといつまだ僕たちがいなかつた頃
電車から見えるイオンが大きくて走馬灯にはなれないだろう
疑問符がない生活の中にいてGoogleマップの文字の多さよ
ぶよぶよになつたきゆうりを捨てるとき神の目つきをしている僕だ
ある程度気持ち悪さを覚悟してハンバーグを切る 何もなかつた
そうやつて逃げてきたんだほとんどを無口なままで終わる夕食
透明なもので包んだ違和感を言葉にできず次の話題へ

一目惚れ誰よりナツなマーメイドこれつてもしや運命の恋?
我爱你ビーチサイドのVENUSへヒトナツの恋一緒にしよう!

はつなつの波打ち際で恋をしたきみと百年先を生きたい

昼下り微睡むきみのパラソルになりたいくらいきみが好きです
僕たちはパピコ分け合う距離だからもつと近づきたいと思うよ

夏期講習帰りの道を一人きり歩く5分が夏の楽しみ
新しい浴衣は大人びた藍できれいだねつて思わず言つた
花火咲く宵の空見るきみの横顔がきれいでまた惚れている

今のところ明確なビジョンはないですが。

どういうことかというと、回文には「緩和規則」というものがある。どういうことかの説明に意味不明な概念を持つてくるなんて話が下手だなあ。ということで先に「緩和規則」を説明しよう。

さきの「竹やぶ焼けた」は、誰がどう見ても回文だと思うはずだ。「だけやぶやけた」、逆から読んでも同じである。では、「誰か書かれた」という文章はどうだろう。こちらは「おやつ

と思う人が多いのではないか。確かに、最初の「だ」と最後の「た」に濁点のあるなし

が存在していることに目をつぶれば回文だ。とはいっても、目をつぶらなくてはならない。

このように、誰がどう見ても回文だとは言えないと、誰がどう見ても回文だとは言えないけれど、惜しいし回文ってことにしていいんじゃない、というのを「緩和規則」という。

の構造を定義したがる人は少ないのだ。

簡潔に説明すると、「異音同字」は「下手なあなたへ」みたいな回文のことをいう。文字上は「へたなあなたへ」と疑う余地なく回文だが、発声上は「ヘタナアタナエ」と疑う余地もなく代の定義上は「オトコノコトオ」である。ワープロ入力するときは「WO」なので、それが発声に影響する気持ちはわかる)、文字上は「おとこのことを」となっている。

一方の「同音異字」は、「男のことを」みたいな回文のことをいう。お察いいただいたように、のといぶかしむ方もおられるだろうけれど、現代の定義上は「オ」である。

ときは「WO」なので、それが発声に影響するときにはわかる)、文字上は「おとこのことを」となっている。

やつと冒頭に話を戻すことができたので、ひとつ問い合わせをしよう。「下手なあなたへ」のような「異音同字」の回文と、「男のことを」のような「同音異字」の回文どちらのほうがより「回文」らしいだろうか? 前者であればあなたは「文字派」だし、後者であれば「音派」だ。

どつちも回文じやねーよ、と思う人もいれば、どつちも不自然に思わない、という人もいるかもしれない。ただ、ほとんどの人はここを感じ方に濃淡があるのでないかと推測している。

もう少し例を足すなら、「泣きつ今日来し吸血鬼な」という文章は、パツと見た感じ回文ではな

月光は五月の雨をくぐりぬけ波止場どしつこのうつくしき場所
モーツァルトに副作用あるらしという眉唾まことしやかに皐月
Heavenly blue という名が朝顔を離れゆき青そのものとなる
はつなつの夢のあわいに自画像を残してバンクシーは去りたり
フーコーの振り子に触れたわたくしの裡にはつかに傾く地軸

Windows のアップデートのじと過ぎて六月は誰がためのまぼろし
蟹 わたくしの眼に燃え尽きてゆく夏の夜の永久機関
海へ来て理由なく泣いているような女がけれど美しかった
はつなの夢のあわいに自画像を残してバンクシーは去りたり
フーコーの振り子に触れたわたくしの裡にはつかに傾く地軸

泥のなか咲いたあなたに言葉など届かないはず戦つてゆけ
片腕を失くしたつていい願いが叶うのなら当たり前でしよう
アルコール飲料ブルボン王朝を知つて居る鳥が朝に囀り
奥歯にはサラエボ事件がやつて来てダリの絵画を嘲笑して居る
胃洗にはアシスタンントが要るだろう月の蓋ではお茶が零れる
難解な奥歯に恣意の私意が有る紫衣を着る僧おかげ横丁
時が満ち奥歯に服がかけられる若葉と同じ色のアリマキ
昼間からビールは飲まない平等を壊して居るのはレモンサワーか
難解な奥歯に口内炎が添い漆喰工事が終了しました
カルピスを炭酸水を混ぜて飲む僅かな驟雨が午前中に降る
恨みまで捨ててしまつた君なんて生き物じゃないとあの子は言つた
泥のなか咲いたあなたに言葉など届かないはず戦つてゆけ
片腕を失くしたつていい願いが叶うのなら当たり前でしよう
大脳に居座る砂絵とかしてネクロフィリアの夢うつす朝
奴隸から神に成り果て鞭打たれそれがあたしの骨になつたよ
むずかしいこと言わないで好きでいてベッドの上でごはん食べよう
ほころびに光が差すとき世界を愛し始めるぼくは死はない

【難解な奥歯】

石川順一

エンドレス・サマー

伊藤すみこ

アルコール飲料ブルボン王朝を知つて居る鳥が朝に囀り
奥歯にはサラエボ事件がやつて来てダリの絵画を嘲笑して居る
胃洗にはアシスタンントが要るだろう月の蓋ではお茶が零れる
難解な奥歯に恣意の私意が有る紫衣を着る僧おかげ横丁

時が満ち奥歯に服がかけられる若葉と同じ色のアリマキ
昼間からビールは飲まない平等を壊して居るのはレモンサワーか
難解な奥歯に口内炎が添い漆喰工事が終了しました
カルピスを炭酸水を混ぜて飲む僅かな驟雨が午前中に降る

波止場から広がる海は無機質で街の全てを包む風呂敷
トビウオと一緒に見たい全身ではしゃげる人に出会えたようだ

トビウオの側から遠慮されている土曜日はまた大雨らしい
二学期の初日のようにぎこちない関係性を保ちたい夏
アウト・イン・アウトを常に意識して魚群の中で波に揉まれる

ねじひとつ無くした夜の象徴は鱗のごとく輝く目蓋
ブルメリアだらけのシャツを着ただけで太陽よりも眩しいわたし
ばあちゃんのアイスあるよはあづきバーあるよの合図 もう来ない夏

引き金はあなたにやらうこの恋は鉄砲ひ
とつ蛭へる恋だ

臘

浮気に没入していく主体の、比較的前向きな態度が
緩られた連作にあつて、最もそれを現した一首であ
る。本来〈鉄砲〉を〈蛭える〉行為は自殺に直結
するものであり、それはあたかもこの浮気の行き着
く先を予言しているようだ。そしてまた、口淫を暗
示させる構造をも合わせ持つていて。にも関わらず、
その硬質かつ清々しい読み味により、この歌は主体
の〈この恋〉への前向きな態度を読者へ訴えてくる。
捻れそのものである。

ざわめいたまま終礼は始まらずいつしか
森に変わる教室

泳二

十代の記憶。とてもロマンチックでとても大雑把な
下の句の措辞に魅かれる。魅かれるのは、そもそも
記憶は大雑把なものであるし、そもそも十代という
のは大雑把な年頃なのであると知っているからだろう
うか。なんてちょっとしみじみしてしまつたじやない
か。

老いてなほ夢見ることの罪なれや迷へる
道に若葉茂れる

横雲

現代では、「夢を見るのに年齢なんて関係ない。何歳
からでもチャレンジできる」といわれることが多い。
しかし実際には、年を取った人にしか分からない悩
みや迷いがあるのだろう。
迷いながら歩く道。そこで見た生い茂る若葉。その
先は、迷いの道の出口につながっていると願いたい。

白軒車で葱を押さえて走つてゐる葱は時々
飛んでいくので

西鎮

一首評

雀來豆

一首評

こうげつしづり

白軒車で葱を押さえて走つてゐる葱は時々
飛んでいくので

和田晴美

一首評

chari

一首評

こうげつしづり

葱が飛んでいくのは「時々」。飛ばないときだってあ
る、ことはわかっている。でも、「時々」が怖いから、
押さえる。そんな自転車の漕ぎ方はけつこう大変だ。
葱の安全か、漕ぎの安定か。人によっては選択が分
かれそうな絶妙のライン。この人は葱の安全を取つ
た。取りながら言外に感じる、押さえなかつたとし
ても葱が飛んでいくわけではなかつた道のり。それ
と合わせて思う、この人が葱を抱えて自転車でゆく
回数。生活の回数。



多くの葉を携えた一本の木は、陽や風が当たれば、
それはもう美しい景を見せます。しかしその一枚一
枚の葉は、実際は少しでも日光を受けてより濃くな
りたいという一種の生存競争に身を置いており、お
互い同じ木の一部であつてもそこには胸をつかまれ
るような切なさが横たわります。淡淡とした中に、
表面ではすぐにはわからない深いところで、競争を
強いる時代を生きる私たちを重ねねずにはい
られません。

一首評

そらよみ



前号の「うたそら」から

気になった一首をとりあげて

200文字くらいで語る

一首評のコーナーです

内外と投げ分けたあと真ん中に投げるみたいな選曲をする

去年

深影コトハ

這い這いを覚える前に死んだ子が乗せられてゆく白いコンベア

深影コトハ

なにが自分の真ん中か分かっていて、内外にも振つてみて。こと音楽に関しては自分のこと分かってるよなあという感想とは別に。連作のほぼ中心に置かれたこの歌は外皮に包まれた種のようです。外側に配置した歌ほど外からの視点になつていて、冷静に状況把握してこの『真ん中』を守つている。一首目の『真ん中』とも呼応していて、どんな状況でも自分の真ん中を見失わない強さが強調されていると感じました。

一首評

雛河麦

西淳子

春空の余白のようなつまさきをきみは
ぱーんとぼうりだしてる

雨虎俊寛

春空の余白という言葉が、青春そのもののようなデート相手の「つまさき」に続くのが文学的思索を誘う。輝かしいだらう春空なのに、その不在の位置たる「余白」に「ぱーんとぼうりだ」されているつまさきは、春空に対峙して描かれている。彼女の春に対する「ぼうりだし」たような挑戦の意志を歌人は見たのだろうか？しかし、それくらいつまさきが美しく表現されているのは、歌人の愛情ゆえにだろう。つまさきに象徴された彼女の美しさが、印象的だ。

一首評

大坪命樹

薄まつてしまつたきみとの毎日を混ぜても混ぜても透けてくる底

千原こはざ

イメージとしてまず、色々な色の水彩絵の具を水で混ぜたような色どりのイメージがわきました。でも、混ざつてぐちやぐちやではなくて「透けてくる底」なんだ、と意外でした。透き通つて綺麗だけどちらと切ない、不思議な歌だと感じました。

春空の余白といふ言葉が、青春そのもののような

天国つてちょっと怖いところだなと思いました。お散歩カートを天使が押してくれるとかじやないんだ。。。コンベアのほうが効率良さそうだからしゃあないのかな。這い這いができる小さな子は這い這いで天国内を進むのかしら。車椅子を自走できない人や寝つきりの人もコンベアなのかな。などと、色々想像できて興味深い一首でした。将来天国へ逝くことができたら分かるんだろうけれど、私はたぶん地獄行きたからなあ(笑)。

一首評

にう

中村成志

買つてから一度もかけなかつたまま壁掛け時計が死んでしまつた

八重森かもめ

率直がすべて良いとは思わないが、この歌は説得力を持つて心に刺さる。ああ、時計は死んでしまつたんだな。壁にかけられてしまつたのか。壁にかけ箱から出さないまま壊れてしまつたのか。それとも、まだ生きていた時計を不要として廃棄してしまつたのか。いずれにせよ、主人公の身勝手不注意によつて一つの時計が死を迎える。それはひとつ時間、あつたはずの空間の終わりを想起させずにいられない。

一首評

江口美由紀

アスファルト

うきすけ

雨あがり

泳二

ポツチヤンと一滴よだれを垂らしたら重たい腰を上げるエアコン
春すぎて「お客様忘れ物ですよ」天窓ごしに夏来るらしい
引き出しの奥で壊れた要から芽吹いて扇子は6年目に咲く

高架横の一方通行無視して自転車駆けるバス、Pathの響き

立ちこめて揺らぐ水蒸気 暗渠ではないけどたくさん柱が架かる

雲間からシーブリーズが漏れてきてフタ閉め甘い雷神恨む

置いてつた傘を見つけた先輩と蝉とブールと焼けたアスファルト

寝て起きて西日をうける貯水タンク梅雨前線偵察機なし

屋上模部 III

宇祖田都子

冬の離島へ

江口美由紀

かたつむり注意の掲示吹き飛ばす青葉嵐に真夏の予兆

ドアノブが引つ張るたびに取れる日に受信している微弱な電波

屋上が水面と化す梅雨の晴れ波紋はバクの産声だから

板書するリズムでかかる先生が温めている卵の中身

模部にてラ行変格活用のように口承されてる哀歌

踊り場が浮遊するのは中庭の池の形が透けているせい

機関紙の編集会議七月の特集記事はバクとピロティー

夏服の胸ポケットにシャーペンの2ミリの芯とシユプレヒコール

島の地図に安里屋クヤマ生誕の地と墓がありまづ墓へ行く

自転車で浜へ下ればいかじに冬には冬の蝶おとずれて

手のひらを海にひたして星の砂さがす遊びは二分で終わる

ならぬならぬビーチリゾートならぬという札が三本等間隔に

安直に同意しかけて立ち止まる イペーの花が空が見ている

雨上がりの闇はリュウキュウアサギマダラ飛び交うような気配に満ちて

それはそれは美しい妻を（サユイユイ）娶ることができなかつた君よ

この浜を一人どこまで歩いてもどこまでも島民でない影

眠たきをコーヒー飲みてふるはせしあのころの朝今は思ひ出

起きてすぐきみ眠りをるやとみやる顔のそばにあることあたたかきかな

モーニングデプレッショングが正体ぞ会社勤務のもの憂きなるか

春のあさ病ひと古りに汚れたる我がこころぎは絶えて染めなむ

まどろみの深きうるおひ偲ばるる涸れしこちの五十路の朝かな

あしひきの山路のほどにいつか見し旭の輝きおぼろに偲ぶ

朝寝坊たのしまるれば休日の恋しかりきか ああ睡眠力

若き日の眠氣ぞ死への郷愁か歳ぶり眠り浅くなれるは

水道の蛇口の水を一杯ねどんな料理の後にも空に
富士噴火地震津波事故事件ひとに見せろよ分析結果
似合うよね羽衣來たらからやかに後追う我の悩みを飛ばす
滝匂い水のイオンと植物の匂い混合分析したし
観覧車ちやり錢ぶちやけ真つ白に意識遠のく君は見ぬふり
白鳥の群れが来る池湖で泊まる優雅な歌人を思う
花見弁当ひらいて行う安全の分析戦争放棄を含め
ろくでないごでもよんでもないんです桜の雨の鶴舞公園

どうかしているかい

岡田奈紀佐

週末メニュー・サンクス

金森人浩

嘘をつく準備のためののど飴をSuicaで買えばベンギンが鳴く
まだ生きているのだろうか短冊に粉骨碎身と書いた男子
音姫を鳴らしてトイレで泣くというドラマのシーンを真似てみただけ
お手元に早押しボタンがないときは二分休符でも代用できます
世界での存在感がないためにどの髪形もしつくり来ない
ドーナツの穴なら海へ向かつたよ来世は泡になるんだそうだ
目薬を点した直後のゆらめいた視界の隅に飴のセロファン
折りたたみ傘をたたんで城島が釣り師になつた世界を歩く

水を飲むつもりで水を入れたのに昨日のせいで薄い珈琲
もしかして爪切りだけを専門に盗む空き巣がいるのだろうか
囚人の助言で女子が犯人を追うアメリカの映画を借りる
デパートで偉そうだけど役割を果たしたことがない食器たち
火星に住むときに備えて一人でも楽しいボードゲームを探す
朝四時にもらったログインボーナスが今日という日をさらに彩る
カニカマはカニカマの本物を目指しその先にもう蟹を見てない
労働を明日の僕にさせるためアラーム予約して僕は寝る

YOASOBIの「夜に駆ける」を流すから君のこころよあそんでおいで

◆ 六浦筆の助

ひとりでも遊びはできるひとりでも結婚できるひとりで死ねる

◆ 六厩めれう

幼な児が遊び疲れて早寝する仕事疲れの親は眠れず

◆ ゆりこ

クマを手にひとり遊びをしてる子の好きなオヤツはチョコレートだよ

◆ 村田一広

観覧車遠くに玩具のようにありカラカラ廻る胸には渴き

◆ 吉田八尾

純白の花片広げ風と舞う乙女の姿ただ愛しくて

◆ 夜花

雨の日も来ないあなたを待つてゐる名前も知らぬ遊具となりて

◆ 龍翔

遊び、の意味は年々変化してご飯を食べる遊びをしている

◆ 芦花

みずからを遊牧したく心もち多めにチャージしておく Suica

◆ 若枝あらう

遊覧船巡るめぐるよ 湖よ、ひとつひとつの音響を聴け

◆ 渡邊知博

鉢植えに土きつちりと詰めているあなたに欲しいウオータースペース

◆ 和田晴美

「遊」



テーマ詠

もう二度と会えないだろう夏の日の川辺で遊んだ謎のトモダチ

夜九時に手つなぎ濡れて見下ろした遊水池には闇が波立つ

◆ 離河麦
◆ ヒプノ寿司マイク

遊ぶときぼくはひとりで遊ぶだろうたつた1つの小さな町で

◆ 平本文
◆ 廣珍堂

周遊の船のさざなみ打ち来たり大津の宮の名残の岸に

◆ 笹地静恵
◆ 福山桃歌

成したぞタイムマシンを人生のすべてを捧げほんとうに完

◆ ほしむうコト
◆ 細川エリカ

星形の氷を舌で転がして遊びだなんて嘘についてさ

◆ 歩歩
◆ 真野ありか

惑星を遊星と呼ぶことを知り横断歩道でホップステップ

◆ 御糸さち
◆ 三浦なつ

あやとりの手と手に架かる赤い橋キヤツキヤ笑つて渡るのだあれ？

◆ 深影コトハ
◆ 衣未

どうしても泣きたい時間を賭けようか（濡れそぼつだけの遊び事）

◆ 虫武一俊

ならないしなりたくもないキリギ里斯羨むアリはころされました

◆ 三遊亭某の嘶のテープそれらすべてを抱いて眠らう

赤出して青出さないで赤止めて水道代のかかる遊びだ

◆ 五郎左衛門

はじめての外の世界に触れていま自由に遊ぶみどりごの髪

◆ おひこ

時々はわざと混んでる列にゆくグループデートの遊軍として

◆ おひこ

海に行き海に入らず砂に寝て笑い転げる幼児達子どもの遊び

◆ おひこ

働くのが得意ではなく 遊ぶのも得意ではない 竹林揺れる

◆ おひこ

一人称

がね

二と三の間

河岸景都

見下ろした私の手まで私だといつから信じ始めたんだろ
眼球に私がいると思う日はホットアイマスクをしたくなる

脳みそがぐわんぐわんに揺らされてジユースになつても私の死体
お互いのキャラのチューニングが済んでいない時だけ「僕」が生まれる

ドランク工の勇者にがねと名付ければ立派ながねが魔物を倒す

静物に分類された林檎から覗かれているスケッチブック

雨粒を拒否するための傘をさす 浮かび上がった輪郭になる

友人の自虐にそつと笑うたび海馬の中のみどり児が泣く

益獸

涸れ井戸

それうすべてを抱いて眠らう

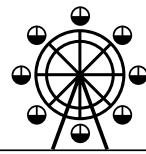
菊池洋勝

オンライン句会に歌会点と点つながつてゆく不思議な時代
毎日のようにメールを書きブルーライトカットの眼鏡を洗う

大小の公募いちいち気になつてスパーリングのつもりで応募
自習用ノート全然埋まらずに何処かで何か空回りする

玄関にヤモリ這つて先週は車の中にも潜んでいた
「ネズミ捕りホイホイ」が良い仕事場でアドバイス得て買って帰った

ヤモリとは益獸である良心と葛藤しつつホイホイ使う
モニターを介し近況語り合うヤモリのことは話さずにおく



「遊」

米を研ぎ浸した水に手を入れる川遊びせし遠き日のごと

遊園地で観覧車に乗ることも叶わなかつた恋よさよなら

遊覧船 君と乗れたら てのひらを 重ねて一緒に海を見たいな

風に攫はれる遊具を夕暮れをきりきり舞ひを笑つてゐてよ

泣く前のあるあなたの頬が早朝の遊覧船のように静かだ

洞爺湖の遊覧船に乗りながら遠いあなたの景色を見ている

切り角が狭いハンドル窮屈で遊びは要るよ人生なども

ゆく川に糸はもつれてあやとりは曇りみ晴れみひとよのあそび

それぞれの風を絡ませ遊歩道 夏日は君の匂いが馴染む

遊撃手の守備位置ちよつと深くなるまたこの場所へ帰つて来なよ

明けがたぼくを遊びに誘うがむしやらなアンのような生姜色の猫

母と子で水気を拭いた手の甲にしづくを落とすはかない遊び

遊園地最後に行つた君の手を最後にとつた閉園だつた

毎日が日曜だから気持ちよく寝息をたてる隣の夫は

長い長い滑走路みたい放課後のあの遊歩道を駆けて僕らは

◆ たえなかすず

◆ セサミスペースM

◆ 草流

◆ 雀來豆

◆ 諏訪灯

◆ 西鎮

◆ 汐射ハルカ

◆ 紫苑

◆ 佐藤氷魚

◆ 黒須紗里菜

◆ こうげつしずり

西暦二千二十一年六月の扇風機

くうだたけし

夏至の外面

小泉夜雨

大切な書類が風でばらばらになつても笑わない扇風機
うなづいて励ますような場面でも横に振るしかない扇風機
生きている人が近くにいなくともまわり続いている扇風機
一時間まわつていればモーターに熱が溜まつてくる扇風機
足もとに風は届かず夜死んだ虫の死骸がある扇風機
タイマーの時間が経過して止まり止まつたままになる扇風機
まわらずにただ佇んで窓からの風に吹かれている扇風機
全力の「強」であつても人類の脅威にはならない扇風機

ややゆるい眼鏡をかけてわたくしの拳動でゆれうごく世界たち
ふさはしい公園として陽を浴びてまことしやかに朝のはじまり
不穏な天氣になつて参りましたと布団を干したをんなの顔で
閉ぢた目に夏至を泳がせ人々はたつたひとつ夢をみてゐた
さいはひ、それはずいぶんやはらかで、それは山崎パンのトラック
袖なしの防具はためきさんさんと暴力のふる公道をゆく
壊れてもいいものとしてわたくしは在る さやうなら、もしお別れならば
みづうみをすることからその鳥は花筏とも云はれたのです

あぢさる苑

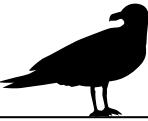
古閑弓子

メメント

御殿山みなみ

裏通りゆけば鳴るなり軒先に風の訪問告げる風鈴
大空をささへるやうに立つてゐる鳥居に二羽の鳩が止まりつ
境内に靴裏の跡あまたありわが靴裏もやがて紛れむ
木の間よりスポットライト差すことくひかりの中にひらく紫陽花
やへの花濃きも淡きも集ひたるあぢさる苑を並んで歩む
くねくねと道を曲がりつどこかしら出会つた気がする花も眺めて
あぢさぬの色のかすかなうつろひとこのひと月の雨量を思ふ
六月をしづかに畳む紫陽花はスマートフォンと胸に収めて

信号が赤のときだけ見る木だね「いちょう」の下に（いちょう科）とある
突つ伏した背中に乗れる季節つて梅雨だけだらう机に輪ゴム
配達の人にくちんとお礼する遺書に名前を書かれたくない
日本人だけどピアノを弾けたなら弾くのだろうか日本の曲を
屈強な男に「十万円です」とすぐまれて払つたカードだよ
東京のオリンピックをつねつたら痛がるかしら画面越しでも
人生をやりなおすあと覚えてる前の人生 ちくわに、穴が
からだじゅうぶでござりますラーメンをラーメンスープから剥がしてゐる



Calling たゞぐば鳥のさべづりや草木を揺らす風に喚ばれる

Calling 召命として与へられしたことなどなにもないことを知る

Calling さすれば我は如何やうに生きればいいといふのだらうか

Calling 骨董店の片隅に売らるる古いボーンチャイナよ

Calling 混じり氣のない少年の眸をかつて持つてゐたこと

Calling 馬、両翼を無くしても我には見える（まぼろしなのか）

Calling 全方位ビルに囲まれて、耳をすませばうめきんゑする

Calling きみが泣くなら我も泣かうメトロポリスの一員として

ほのはは踊る

酒匂瑞貴

黄砂にて隠れてしまふほど薄い真昼の月の疼く春空
君じやない人が好きだと言つていた絵画を見上ぐ君と並んで
ゴッホの描く黄色はほのほ吾の殻を型取るやうに燃ゆるひまわり
糸杉は真直ぐな木だと話す吾を君は光のやうに見つめる
空が生きているやうだね星月夜を見る横顔は口をつぐんで
皮膚の下ほのほは踊るお互ひの瘦せたる腕をきつく絡ませ
それ違ふ人々すべて吾にすれば世界の補色となりたるゆふべ
アーモンドの花の絵の中もしも吾が吾じやなくなつても引き止めてゐて

風の抜け道

佐藤水魚

かなしみを置き去りにした真夜中のバス停に降るひとすじの星
足下でたゆたう月を蹴つてゆく夜の雪に裾を濡らして
花束のほどける記憶 ひときれのフルーツタルトにフォーケを入れる
わたくしという映写機が映し出すたつたひとつの大喜劇がある
過ぎた日の水を吸い上げガーベラのか細い首はますます細い
簡単なことだったんだ朝が来て窓を開けると風の抜け道
A線の弦がゆるめば糸巻ペダまわし音の流れにふたたび乗ろう
まつさらの手帳にミントキャンディは緑の茂る季節を描く

自転車の鍵を毎朝放り投げ放課後探す不安な遊び

◆ 宇祖田都子

あなたにも悲しいことはありますか晴れた日の遊び方を知らない

◆ 泳二

心だけ空に自由に遊ばせて窓を遮るカーテンを選ぶ

◆ h s

流れてる空気のすじの緑と遊ぶうてなの重い音楽の色

◆ 岡田濫

夏空にぱっかり浮かぶあの雲がまるで綿菓子あの夜の屋台

◆ 小椋 杏

天国がいつも春なら雪合戦なんてできるの今のうちだよ

◆ 音平まど

Winnyの金子勇の名がなくてsoftether 登大遊

◆ @kaizen_nagoya

鍵なくて遊びに行つて帰つたら鍵なくてまた遊びに行つて

◆ 金森人浩

「それなりに充実してたよあの頃は」遊び人だつた賢者は語る

◆ 神ヤ飛ビ魚

ドッピンという球遊び流行し中庭の石畳の忙し

◆ 潤れ井戸

眠れない夜は夢想の海へ行く回遊魚にもなりたくなつて

◆ 菊池洋勝

僕が絵を書いてゐるのを見て人はちゃんと一人で遊べてますね

◆ 河岸景都

連れだつて来る孫もなく老人が静かに集うゲームセンター

◆ 橘高なつめ

園庭にできた大きな水たまりさえも遊具になる雨上がり

◆ きつね

通り雨の遊撃の真ん中を行くミスを慰められた帰りに

◆ 君村類

鐘が鳴つたら帰りましょう少しすつ超えてはいけない線が近づく

◆ 相河 東

逃避行先は夜半の遊園地全部あなたのための光よ

◆ 青藤木葉

まぶたからするするすべり落ちてゆき長いまつげに隠れてみたい

◆ あき子

黒タイル踏んじやいけない遊びからドロップアウトしたははじまり

◆ 秋山生糸

ひきこもりにはきつすぎる遊歩道なんてやさしい字面だけれど

◆ 麻倉ゆえ

寝転んで地球儀回し遊ぶ子ら宇宙に浮かぶ冒險者かな

◆ アダムス理恵

遊歩道までは一〇分あるという一〇分間の話題を探す

◆ 天野うずめ

土佐堀の遊歩道^{プロムナード}の水たまり手を離さずにふたりは避ける

◆ 雨虎俊寛

私は遊びだつたの？本命は他の猫なの？ねえドラえもん！

◆ 新棚のい

真夜中のビルの谷間のブランコに乗りにゆきたき遊星の夏

◆ 有村桔梗

あらわなる背に触れている このあたりを遊撃手なるひと守るらし

◆ 五十子尚夏

砂遊び水遊びの果てカツを食べ噴水の頂上にベルの幻

◆ 石川順一

絡みつくメロンミルクのけだるさを抱いてプールへ溺れるように

◆ 泉 葉子

夜遅く一人で遊ぶ約束も許されるのは今夜までだよ

◆ 伊藤すみこ

この星の水と空気が消えるまできみとふたりで遊んでいよう

◆ うきすけ

はつなつこい

汐射ハルカ

急所を教わる

鹿ヶ谷街庵

まあいね、夏の緑と黒い縞赤い三角きみはどう切る？

かきませて青い水玉はつ恋を早まる鼓動鳴らす水を

かわいさの時はすぐさま過ぎるけど波残りの気配たのしさ夕焼け

あいのほし宿したきみの瞳から放つひかりはまちを照らすよ

悠久を流れる河や星霜^{いくさく}の隔たりなどは超えていけるさ

かがみ見る目尻そばかす深い溝めだまは茶色くせ毛も茶色

部屋の灯を消して暗幕おりてきて浮かぶおもかげ伝いことばと

かみさまがくれた僅かなさちかぜはめぐりあわせのきせきを走る

詩季

NO PRINCESS, NO LIFE.

しのだめい

幾千のプロセスを経てここにいる二人で種まく庭は涼しい

同じ人教えたはずの餃子でも姉妹は違うひだを重ねる

それはもう美味しいはずだ実家から戻る早朝父のコーヒー

藤の花掘った墓石はくもり色仕上がりを見てよし、と言つてね

あの日からずうつとずつと新しく作られ続け道は終わらず

ほうれん草すり潰しては舌に乗せ君を見つめた 終わりゆく離乳
その歌がしみる理由を知りたくてまた囁みしめる何度も何度も
種をまき苗に水遣り実を拾う僕らを生かす土は黒々

つくる



テーマ詠

「遊」

虹を待つ

嶋田さくうこ

六月の雪を思えぱ

雀來豆

鳴き声も毛並みも生きているみたい水無月の浅い夢に会う猫
ひと夏を君と過ごしたタイトルを覚えていない映画のように
あかねさすケンタッキーをほおばつていつか誰かの役に立ちたい
海で拾う石に名前をたんたんと生きる日々にも表彰状を

夜を朝を昼を過ごして宛先を書かない手紙ばかり増えゆく
ズッキーニすべらかに切る夕暮れに猫はあくびを我慢できない

夢も希望も欲望もない日曜日はホットケーキを食べに来ないか
ソーヴィニヨンブランを贈るわたしではない人とゆく君の門出に

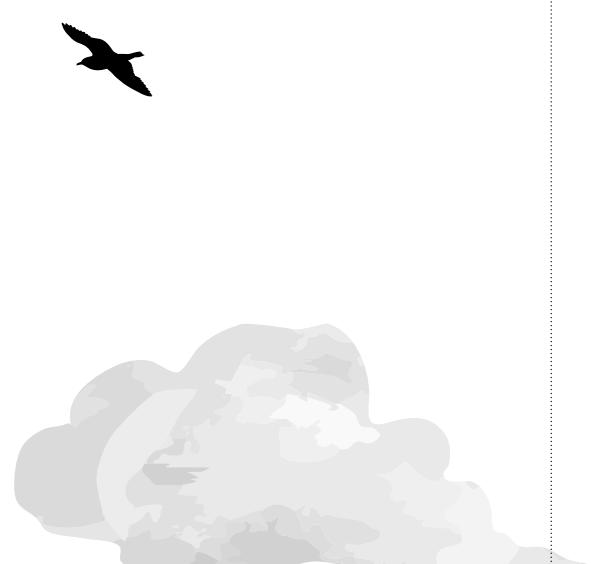
水無月文月

西鎮

君づけで呼ばれてたつけ六月の湿った風にさよならをする
お互いへ点けた漁り火追うようにまた歩きだす東京は海
たんたんと仕事をこなす華奢な背をひくくさらして親燕飛ぶ
ピストルズを教えてくれたにいさんが通えなかつた高校へゆく
とうさんのメガネをかけてとうさんの強がりだつて気づけば夕陽
薄荷飴碎いた奥歯ちっぽけなぼくがみあげた七月の空
萎れかけた紫陽花にふる雨だつた やさしいひとを信じきれない
あまがえるが肺呼吸して鳴いているぼくらがいまだ慣れぬ世界で

テーマ詠欄 「遊」

Go To
Next Page



あおあおと光りだす軸よ四月この古い歌集を文字に起こせば
五線紙に撒き散らしたる月の骨ほろると夏の雪降らしめよ
側溝の蓋から覗く露草の青が光つて五月を告げる

水無月ぼくら魚のように沈黙しビル・エバンスの水玉を聴く
八月の風吹きぬけて鷺池に幻のごと百日紅ふる

さて椅子はどこにもないのでことなくあるつて氣のする十月の夜
霜月朔日ロビンソン百貨店屋上森森として月蝕を待つ人のなく
灰色の九月のビーチハウスではまだ瓶入りコーラを売っていた

君はこれあんまり好きじゃないかもと言われて嫌いになる黒ビール

東京の夜の明るさ金魚鉢に金魚の影がぱつかり浮かぶ

夏の風吹くほど夏が訪れてスイカの肌をなぞる水滴

卒業生代表になりこの町で卒業生代表の子になる

葬式の合間に行つた砂浜の辺り着きたくなかった流木

偶然に生まれたわたし飛び散つたインクで作る銀河のひとつ

会社宛で送つていいと言う友の少し大きい結婚指輪

コーヒーの香りに満ちていくオフィス 好きと言われて好きになる人

テレビに人が

渡邊知博

雨降りの夜がちよっぴりあつくなる停電だつてここらいつたい
ヒトのいる部屋つてこんな生きている人形みたいに寝転んでても
いつだつて逃げ出したいの、こんなどこイキテル部屋は息苦しくて
星ひとつ輝かせない都会でも光つてゐるよブルーライトが
雨粒を潤らした空がたぬたう雲をおしやつて見えてくる月
ゆつくりとひかりがちきゅうにちかくこのへやにとどくのはいつ
白月に晒されているこの部屋のテレビにひとが こつちを視てる
ひとの手がカーテンを・世界を開くあちらに咲いた紫陽花の花

通院日

諏訪灯

ノンストレステストの音がする 胎児はもうすぐ乳児に変わる
妊婦より中年婦人が多い日で待つてゐる私は中年側で
そしあれば内診を恐れなくなつたずいぶん時間は掛かつたけれど
マタニティーヨガの掲示で思い出す逆子が治るのを願つた日
今日もまた産まれる命と閉じていく命がここで交差している
平熱を受診資格とされているそんな矛盾に慣れてしまつた
長椅子に規則正しい空間を生み出すように誰もが座る
昨年も例年通りの手術数でしたと伝える紙の尊さ

ストロベリー風

セサミースペースM

チヨコレートコスモス

たえなかすず

風の駅目の前に立つワンピース、ポニー テールはためきフラッグ
近くで、めがねを顔からはなして眺めている女性のしなやかさ
辺りを照らして粒々の太陽粒々のひかりの球体で
引つ越してカーテンの下が足りないしかたないお部屋のチラリズム
菜園の緑の棒に白い紐結ぶ老人と紋白蝶
菜園の緑の棒に黄色い紐結ばれて無人紋黄蝶
掃除機にストロベリーを吸いとられ酸っぱいやつに決まつてゐるぜ
トートのなかに入りたいそれを君が首からさげ草原をゆく

神様はどこにでも居て見てるつて そうね見てるだけの神様

制服のスカートの花ひらかせて自転車が来る 下は短パン

5階まで階段で行くと何故かしら4階で着いた気がしてしまつ

急がせて悲しい気分をさせたなら笑いを取らずには帰れない

大丈夫じゃないですよね手を背なに当てる位の支えをそろり

溢れると言つてしまつて構わない降り出す雨には時々濡れる

病室は西へ西へと移されてさいはての窓から見た夕陽

飲み込んだものは魂かも知れん 妹と見たものの話する



草流

オレ、無職！

もう無理だもういいだろう妻に問い合わせ退職届一気に記入す
そんなにも気取つてメイクしてるけどパートに行くだけだろう妻には言えず

弁当を作ることなし妻はまだオレの隣で夢の中かよ

定期預金オレの名義のはずなのにお礼の品はサラランラップか

アンケート職業欄は無職です自信満々記入するオレ

毎日の昼飯なんにしようかな退職後とはそういうことか

妻パート忙しそうにしているが横でのんびり録画の準備
新しき家族が増えた春の午後子犬の名前海賊「ルフィ」

今日咲いた朝顔二つお互いにコンプレックス隠すその色
窓の下きみの自転車走りぬけ 夕陽をすう背がこんなに恋しい

午後一時やさしい風に包まれてあなたと猫が昼寝する夏
今宵こそきみを乗せ飛ぶ天の川 星に濡れないよう静かに

いつだつて私の恋はみどり色ソーダ水のしゅわしゅわのよう
桃色の月がのぼりてきみを待つ 十六穀のおにぎり作つて

ひまわりの迷路できみを「好き」と言う勇気もたら明日は天気
武蔵野はどこまでが夏すずやかに櫻並木にインコがとまる

パンプスとストッキングをはいたまま跳びこむ瑠璃色の水溜り
土砂降りが夜道を照らすギラギラときつとこれからいいことがある
街明かり、車のライト、雨の日の帰り道つてナイトプールだ
本当に防水だった最新のスマホで雨の最期を看取る

友達をナイトプールに誘つたら「何やつてるの！すぐに行くから！」
大きめのタオルを持ってくれた雨より先に涙拭いた
「すぐには無理しちゃうんだから」泣みとおる声に今夜もすぐわれている
本当のナイトプールに行こうつて約束をした雨は止んでた

すぐわれている

瀧口美和

風になりたい

田中翠香

パンプスとストッキングをはいたまま跳びこむ瑠璃色の水溜り
土砂降りが夜道を照らすギラギラときつとこれからいいことがある
街明かり、車のライト、雨の日の帰り道つてナイトプールだ
本当に防水だった最新のスマホで雨の最期を看取る

友達をナイトプールに誘つたら「何やつてるの！すぐに行くから！」
大きめのタオルを持ってくれた雨より先に涙拭いた
「すぐには無理しちゃうんだから」泣みとおる声に今夜もすぐわれている
本当のナイトプールに行こうつて約束をした雨は止んでた

きみのクマ

ゆりこ

落ち込んだきみの希望はテディベア、作つてあげるよベージュ色なら
型紙を切り取る我は夕飯の時間を気にして押す炊飯器
水無月に裁つフェイクファー季違いを感じる我の短パンは黒
ジヨイントが少し緩いねバンザイの手が落ちてきて大人しくなる
グラスアイ強く引く指オリーブの色を選んだきみは優しい
チヨコレート色で刺繡をした口が誰かに似ている おなかが空いた
我は母お花のニンジン3つ入れ少し甘めのカレーを煮込む
蜜月はいつか終わるね羽のない背を縫い留めるラダーステッチ

夜めいて薔薇

吉田八尾

すり減つたピック・カスタム

若枝あうう

たくさんためらい傷を心臓に残すあなたと夕餉を食べる
あなたにはあなたの地獄があることが時に私の希望に変わる
だとしても僕はあなたを泣かせない風の強まる海岸通り
生きるとはひたすら食べていくことだ少ししようばい今日のたくあん
頑張れと言わず言われず生きたいな窓辺にグラジオラスが咲いてる
いつの日かあなたが語る物語そこに私がありますように
それぞれの孤独と秘密を合鍵のように交換し合うふたりだ
来世では空をめざして草原を吹き抜けてゆく風になりたい

しあはせの音

龍翔

はつなつの雨のにほひの野の道を白いドレスのきみが歩めり
結婚をしてゐる人としてゐない人とが雑木林のやうに
読みかけの歌集ではなく本型のリングピローに指輪を置いて
イツモシヅカニワラツテキルと約束を交はす二人は雨ニモ負ケズ
タイミングつかめぬままにわたくしが足元にまき散らすはなびら
ゆらゆらと誰よりもかがやいてゐるけふのぼくらは発光体だ
もうきみはとほくの誰かではなくて同じケーキを切るあひだがら
ハッピイ！としあはせの音立てながらポップコーンは弾けただらう

ボーナスで買ったギブソン夢中つてもう少しだけ言わせてほしい
特別な着メロにしていた頃のサビを INTRO から思い出す
車から降ろすマーシャル 人もたぶん重たいほうが良い音で鳴る
簡単に夢は燃え尽きないけれど先月よりも高いガソリン
原キーにカポを挟んで言葉より伝わるなんてもう思わない
すり減つたピックの先を撫でるとき弦を恨みはしないよ誰も
だとしても生まれなかつたメロディを秘めてすべての旅は終わるんだ
勇気をくれよディストーション 弱虫な俺にも愛が叫べるように

君がくれしココアに触れた唇を起点に体が夜めしていく
精神のひかり届かぬ最奥へ隠す禁忌の思慕の欠片を
夜色の瞳も髪も触れたくて触れられなくてそう君は月
少年と青年の今あわいなるメタモルフォーゼを見る目の熱さ
夜に飛ぶ揚羽のような君の持つ色の彩度が強く溢れる
お互いの胸板を指す軽やかな友情のこと残酷なこと
週末に君と会う事思う度秘めたる夜が零れそうになる
性別を紫とする吾を抜きすいすいと来る日曜の朝

気持ちはつたわる

六廻めれう

最寄えみ

- pp

とうとうと口から滑り出ることの意味の含有率の低さよ
言葉にも賞味期限はあるらしく呼氣の匂いがいくらかばれる

自己啓発本そのままにマウントを取りに来るのは想定内で
言挙げをすれば必ずふいになるだから決して口に出さない

ここからは余談ですがというときに今日初めての生氣みなぎる
権限を持たない人は束になり一つのことを覚えて帰る

他人から言われて腹の立つ言葉レパートリーに加えてもいる
言葉では僕を傷つけられない格好いいゼパトリック・ジェーン

かつば寿司と河童かなしく言ひのこしひからびゆきぬ海苔と銀舎利
らっぱ吹きは喇叭かなしく吹きならしさうじやないのと鳥の和する
はっぴうりは法被さみしく並べをり厄災ありて呪いもなし
しつぽきりは尻尾たやすく切りおとし岩にかくるる赤の一条

はっぱかかげ天晴狸早やかはり花嫁姿もなまめかしけり

らっぷよめる恰幅良しの大男“LOVE”的 rhyme につとはにかみて

かつぶいの水に蜂蜜塩胡椒お皿に注げば河童燥ぐよ
橋詰の祠に地蔵九尊たち芥川なる河童の爪痕

交差点から

村田一広

孤独

ゆや ゆき

交差点曲がるのは労力がいる行けるここまで真つ直ぐに行く
開きたくない傘ひらき僕の陣地を確保して聴くコンサート

トッピングが均一に散るビザはないチエダーチーズのみのところが僕
やつと気づいてくれた頬つべにハート描いて待つてた冥王星は
走ること忘れるほどに放置され中古車は青梅雨に濡れ通し

公園の石鹼がなぜなくなるの？ ネットごと鼠が引きちぎつてく
寸分も違はぬ虹のかかる山 昨日と同じ今日が来てゐる

虚空には鳩の羽根散る 夕暮れが闇になれないまま迷つて

マングローブの森で

茅野

いろはすボトル

chari

メヒルギに近づきすぎて傾いたほうに心の重心がある
ヤドカリをザリガニと間違えたときちゃんと教えてくれてありがとう

潮汐を確かめるよう君が一度、汽水を舐めてしょっぱいと言う
海の森に迷い込んだら少しだけ湿つた空をゆっくりと吸う

そもそも味のソフトクリームを酸っぱいと笑つた顔は君だけのもの
待つことが苦手な君がゆっくりでいいよっていう瞳をしてる

「また行きましょう」に「はい！」って返事する感嘆符に重きを置いて
ひとりでは進まぬカヌーだと思う 君と一緒に歩いてみたい

handmade

千原こはぎ

ツキガラスの動物園

月硝子

カボションでつくる星空 眠れないわたしを空っぽにしてほしい
夏らしくクリアパーツをぶら下げてかすかに重いくらいが恋だ

ゴールドのフレープは揺れるためにある あいたいはいわないたいとい
アンタレスみたいに紅いひとつぶをピアスにすれば嘘はくずれる

完全に戻らない丸カンのよう捻じ曲げたあのふたりのずれは
グリーン、ブルー、ベッ甲、クリア 碎かれた心みたいに散らばるパーツ

星ひとつ加えてピアスは完成しわたしの夜をかすかに照らす
星屑をあつめて瓶に詰めておくいかだれかの夜空のために

花や雨、恋の記憶を醸しつつ猫の額は濃く香り立つ
宵闇に放物線を数知れず描いて恋をする白孔雀

あどけない笑みは奈落のふちどりを秘め柴犬の黒きくちびる
描線のあらゆる型を見せながら川面を泳ぐ蛇の神速

返された原稿用紙に月影が差して蜘蛛へと変わる文字列
指輪とかピアスや靴をすぐ投げるゴリラの檻に似た失恋歌

しがらみがノアを捕らえて人間のあたりで歪む方舟の列
たそがれに軋む廊下でもう逝つてしまつた猫の出席を取る

なまものでござりますので

道家俊雄

飛蝗を握る

中村成志

なまものでござりますのでお早めにお詠みください、四季の風より
尾道の街は坂町海の町初夏の汽笛はレモンの島へ

鯉のぼり泳ぐベランダ泳ぐシャツ五月の風は若葉のにおい
路の葉を傘に見立てたかえるの絵遠い記憶のかすかなみどり
赤薔薇の中に蛙の姿見るリアル親指姫かよ♥

たそがれは自動踏切鶴見線大川駅に薰る草原
はるばるとさぬき香川の琴電の赤い電車に残る横浜風

なまものでござりますのでお早めにお詠みください、四季の風より
尾道の街は坂町海の町初夏の汽笛はレモンの島へ

鯉のぼり泳ぐベランダ泳ぐシャツ五月の風は若葉のにおい
路の葉を傘に見立てたかえるの絵遠い記憶のかすかなみどり
赤薔薇の中に蛙の姿見るリアル親指姫かよ♥

たそがれは自動踏切鶴見線大川駅に薰る草原
はるばるとさぬき香川の琴電の赤い電車に残る横浜風

くろわさん、受験生になる

ともえ夕夏

dictionaryくしゃみにも似てお手本のような発音記号の飛沫
たわむれのこどもちゃれんじから十年ずっと進研ゼミのDM
偏差値が何かも知らずがんばれば高校生になれるでしようか
かあちゃんの焼おにぎりが食べたいと言えり朝からワークを解く子
制服が新しくなる私立女子校の案内わか葉の縁

青いペンで書くと暗記がしやすいと今月二本目の青いペン
ふさやかに勿忘草の群生のように付箋を生やす教科書
夢を詰める隙間はあるか十五才きみの鞄はいつも重たい

わたし宣誓

成瀬悠

誓いますあの日までにはキレイなオムレツが作れるようにするね
誓いますあなたを愛するようにわたしのこともギュッと愛します
誓います一緒に見るのがたくさん増えるように仲良くします
誓います肉球を吸う時は声を掛けて独り占めはしません
誓いますライライしたら物に当たらずにシャドーボクシングします
誓いますあのコーヒーの味がまた楽しめるように淹れさせます
誓います見た目が変わつても嫌なことを言わせないようになります
誓いますじいじとばあばになつてもあなたのことは忘れませんよ

夢のあと

三浦なつ

不揃いな靴下ばかり増えてゆくように重ねる君とのくらし
一言も交わすことなく食卓の黄身をはじめに崩しゆく人
夏の日のアスファルトには干からびた蚯蚓が夢のあとのごとくに
行方さえわからないままふたりきり揺られる舟にかなしみひとつ
テーブルのオリオンビールの空き缶としづかに死んだ昨日のわたし
君の住む島を見下ろす飛行機は夕日に包まれ北へと向かう
夏の夜の網戸に顔をあずけつつ確かに君の寝息をおもう
永遠に戻つてゆけないあの夏の太陽をまだ探しつづける

雑トーストにも遠い

虫武一俊

もう海をいつから眺めていないのかシーチキン缶ぐわと開けつつ
会食をあれから誰ともしていないおれたちだから投石できる
つり革が魚や蟹を模している電車に乗つて向かう海峡
マンションの二階から見る一階の住人の庭、あれはヨドコウ
世代論が語りにくいなわれわれは乱反射して氷河に眇む
指で土を掘り続けている二回目の夏 苛立ちに汗を感じる
もう宇宙に苦しさを託すことはなく 街灯に拋るいくつもの虫
雑という言葉も遠くトーストを牛乳で押し流し込む日々

またおいで

深影コトハ

野菜(短歌)の詰め合わせ

六浦筆の助

京橋のイントネーション懐かしく一人称がうちへと替わる
どの家も皆代替わり千年の紅梅の下でガールズトーク
祇園にはやや不似合いなローファーで硝子細工の恋をしていた
抹茶グラノーラぱりぱり噛み碎き平成生まれの姉さん芸妓
新雪のように磨けよ厨房に青い眼をした見習いが居る
十字路は似ていてどこも違う道こんちきちんの頃またおいで
品川から東京までの7分に魔法が解けてゆく京おんな
おはようを東のアクセントに戻し東京十年目の朝が来る

とれたてに君はかわいい笑顔見せキャベツをきざむ春のリズムで
玉ねぎをみじん切りする君の手はタタタンタタン踊れるビート
やせ土に少々雨で甘きトマト成る生き生きできる介護つて何?
(しなびても包容力だぜ)おっさんにサニーレタスはサラダで語る
ぶら下げてしまふに働くニンジンをバニーガールに差し出す夫
浮気した夫のようなジャガイモをシチューにし、出す妻の復讐
太陽をランプの形に吸い込んでふくらんでゆく畑のなすび

なまものでござりますのでお早めにお詠みください、四季の風より

道家俊雄

飛蝗を握る

中村成志

亜脱臼引きずりながら重ねゆく言の葉はやく蝦蟇鳴き止めよ
すり減った踏み絵をさわるもう誰も踏んでくれない高さの棚の
たいていのものは落とせば壊れるし地を蹴らなければ鳥は飛べない
血の色は赤錆なればなまぐさく鉄のアマビ工煮て湯をつくる
気圧性偏頭痛あり髪の辺の飛蝗を握るほどの強さの

ともかくも泡と嗚咽は昇るもののシャンパンフルート一本に立つ
皮膜のみ凝る血溜まりひりひりと初夏烈風になお流れ止まず
犬の時間芒の時間蝶の時間野原が夏へ向かって戦ぐ

力ボチャを食べる

ほしむう「コト

ナビつきーつくつてわかるはじめてゲーム
プログラミングの短歌のつくりかた

御糸さち

きみのいない世界は別に変わらずに24時間で一日が経つ
下り列車は赤くてドレミを歌い出すきみはまっすぐ海へと向かつた

よろひびもかなしみも同じ意味なのをあの日きみだけがきつと知つてた
ひこまでも続く晴天だつたつけぼくは毛布にくるまつていた

生きることが最善手とは思わない 夕凧 一人で何を見たろう

きみはもう何かの神になつたかなスワローズひいきしているのかな
ときひき思う きみは全然生きていて夜あの部屋でカボチャを食べる
きみのいない世界で別に変わらずにぼくは寝て起き歯磨きをする

走馬灯

おれけ

ひかりの階段みたいになつているフードコートから覗くオフィス
私の四十年をやすやすと裁つシュレッダーは一代目のはず
正しくは三代目だつたシュレッダー入社十年、まだ若いな
若者が社の根幹と訴えて煙たがられた二十年前

消え去つて行く日に貰つた花束に見える入社当時の煌めき
発展の宿根に僅か激励をかけて立ち去る 速やかに去る
走馬灯のようにとよく言うがこの四十年は一瞬だつた
これからの余生の道を歩むため早くも馬を描き始める

岐路そして帰路

三浦くわり

世界中の明かりをつけてしまいそうで降車ボタンは誰かに譲る
真昼間は頼りなかつた看板がしつこく土地を主張している
新作のフラペチーノを飲み干してそれでも寂しい夜をどうする
本当は帰路ではなくて往路だと気付いて更に泣きそうになる
どの角も曲がらず家に帰りたい干渉できず岐路そして帰路
この街のファミリーマートの店員も私を客として出迎える
故郷の言葉でナンパされたから少し話を聞いてしまつた
今日に置き去りにされたい思い出し笑いで生きていくせだから

れんれゅうじたい

にう

光芒の差し込む『天使突抜』を駆け抜けてゆくマスクのランナー
ウイルスがまん延している青空を優雅に泳ぐこいのぼりたち

人通り少ない路地でご婦人方がマスクをずらし井戸端会議

ウォーリーをさがせみたいだ最近はマスクしない人見つけ出すのは

「在宅用健康器具の買い取りは現在できなくなつております」

去年買ったマスクの紐をホチキスで補強する量山の如し

快晴の日にひつそりと巣籠りしうた考えるそんな一日

パソコンの画面でずっと会話する心にやつと ZOOM みてみる

あぢたるとあじさい

西村曜

あぢさぬとあなたが書いてあじさいとわたしが書いて ほんとうに遠い
あぢさぬの見目でのみ咲くあじさいが確かにあつてたいてい赤だ

牛乳にその冷たさをうつされた買い物袋のなかの白砂糖

コインランドリーのなかはいつでも真昼間で眠たい妊婦が今日の店番

路線図のいちばん端にある町に暮らしているよ前世のふたり

黒鍵と発見「博士はそののちの三十年をひとりで生きた」

距離つまり空気の厚みを思うときここまで 473.3km

あぢさぬとあなたが言つてあじさいとわたしが言つて 届いていますか

桃源8(『桃源Q』二次創作短歌)

西淳子

停電

ネコノカナ工

つまらないせかいをかえるおまじない ウーピー、ミンミン、カンフーパンダ
「青春はセミのおしつこ色だよ」と教えてくれたきみと飛びたい

あまりにもゆめみじちよくていつのまにかきみに浸かつてのぼせてたんだ
ビー玉のようにまつすぐ、まつすぐきみにぶつかる俺に気づいてほしい

あのときのふんわりとした風がいい。きみといっしょに風化するなら
きみの手は近くで遠い。待ち受けの、宇宙の果ての手に手をのばす
犬搔きできみの小舟をひっぱるよ思い出ひとつひとつ拾つて
ラブ&サンダー きみの銃声を二人のスタート合図とおもつ

午後七時ばずんとここにかぶさつた闇とくらやみあつちの部屋も
停電の寮舎のなかに夕闇をひとまわり濃くした闇がある
国道のコスモ石油はひかりたちどやら闇はここだけらしい
大きめの声で話せば大きめの声は冴えゆく耳にざらつく
とりあえず帰れるやつは帰りなさい帰れないやつどうしましようか
ああみんなホタルなんだねゆらゆらとスマホのあかり灯して動く
ロックされ閉じ込められたジャージとか脱水中の洗濯機とか
どうしようあさつてからの○○○とか○のこととか○○○○とか

レインボー・レインブーツ (うたの日五・六月まつ)

薄荷。

アサガオが燃える

衣井かだ

ほろほろと雨に撫でられ芍薬は夢とおんない速度で揺れる

大雨が降るときのために用意した星空模様の青い雨傘

音のない世界にぼくらを連れていく夕立はレモンジュースのにおい

ぽろぽろとビニール傘をたたく雨 おはよう地球、おやすみ地球

雨あがりきらめく庭に降り立てば足もとから噎せかえる緑

夕暮れの街の湿度の柔らかさ歩行者信号点滅している

レインボー・レインブーツを光させて水たまり道を選んで歩く

それは祈りの ~GOOD ON THE REEL
ハナウタッパーによせて~ はとサブレ

迷子

衣浜紫檀

絶対にまた会えるつてお互いに信じていたから迎えたこの日
手と手だとちよつと遠いね微笑んで目と目を合わす時間 が止まる

「ありがとう」(ありがとう)つて言いあつて言えないけれど伝わっていた
夢ならば覚めないでつて叫んだの夢じやないから憶えているよ

鼻歌の花ならいつでも咲かすからときどき水を与えてきてね

指ハートなんてここでしかやらないで下手くそだけどそれがよかつた
素晴らしき今日の終わりに素晴らしき今日の始まりきっと祈りの
いま聴いたばかりのセトリの溶けだししてこんなに弾むあやふやがある

ミズクラゲの解説を読むキクラゲの話をしてるカップルがいる
あの世にもこの世にも存在しない夢想みたいな新種のクラゲ

イルカシヨー終わりのイルカ眺めつあまりに深いプールと気付く
深海に住んでか細い光でも光なのだと思ひ知りたい

奇跡つてよくわからない同じ日に同じ魚を見て笑つてる

3回もまわして欲しいウミガメは出なかつたのが思い出になる
閉園後の水族館に客として残れる者はひとりもいない

生き物はみんな居場所のある迷子わたしも海で迷いたかった

マネージャー

ヒプノ寿司マイク

八方遊人

笛地 静恵

手作りのお守りの中なに入れる?ググつて慌てて画面を閉じる
男子つてバカばっかりだ声でかい身体も角張りとつても怖い
親友に引っ張りこまれ入部してがんばれ白米毎日握る

試合後に勝つた相手のスタメンがコンコースからあたしを見下ろす
ニヤニヤとひとりがデカい声で呼ぶ ねえ~マネージャー~こっちを向いて~
無視をしてマネージャーなら大切な用具をバスへと黙々運ぶ

~マネージャー~負けた男子に明日からもいつものように呼ばれるんだな
親友はまんざらでもない顔をして手すら振り返したかったみたい

天気情報

廣珍堂

花にたとえる

福山桃歌

関西弁ぐいと含んだ低気圧明日はきっと東京に雨
大都市も黄砂のなかへ消えてゆき電車の音をごうと聞くのみ

ふるさとの墓地の林の隙間より盆の陽射しは指先に落ち
夏雲をちびっこブールで捕まえて保育園児は水の反映

予報ではプロメテウスが来ないままソドムはゲリラ豪雨となります
土砂降りを摇れるビニール傘に受け遅れたバスを待つ雨男

後輩を風下にして進みゆく吹雪に震む下校の道を
朝ドラの虹の場面を確かめて「行ってきます」と傘を持つ君

綻るように抱きしめているうつくしいきみの名前を花にたとえて
いくたびもくちづけたならやわらかいその手のひらに残す傷痕
まひるまの月を映した湖の水面が揺らぐきみのみだで
ここまでのですべてなかつたことにしてきみを知らない過去を忘れる
よこしまな指でやさしくなるのはふれあいすぎていたいくちびる
なにもかも通り過ぎゆくスピードでふたりをさらっていくながればし
さよならは想定よりも重たくてふたりでいても耐えられなかつた
月並みな、でも切実でありふれたことばできみに手渡した愛

てのひらを重ね合わせてこの人を好きになれないままの六月

輪郭をただなぞるよう 簡単に好きつて言つてしまつていの

絶対に裸足を見せ合えない人をともだちと呼ぶアサガオが燃える
嬉しいね楽しいねつて感情のしつぽについてる哀しみのつぶ

こんなにも空は高くて青いのに君を嫌いな人がいっぱい

新品のカツターシャツはきらめいて親友同盟結ぶはつなつ
遠い星爆ぜていきますあの人の下の名前はなんだつたつけ

いつまでも僕は僕だけどこまでも固有名詞で生きる悲しさ